

## 異文化の中の不和と融和 —コンラッドの二つの短編を通して—

渡邊 浩

**Abstract** Conrad's two short stories, "Amy Foster" and "Gaspar Ruiz," have similar endings concerning the symbolic depictions of the protagonists' children. Amy and her husband Yanko had a baby named Johnny after Yanko (Polish for Johnny). After Yanko's death Amy nurtured the baby and cared for him deeply. In the case of "Gaspar Ruiz," Ruiz and his wife Erminia had a baby during a revolutionary age of Latin America in the 19th century. Ruiz worked for the republicans under Santiella but afterwards Ruiz was betrayed by a comrade. Erminia was a descendent of a Spanish royalist family and held a hatred towards the republican government, so they revolted against it. Ruiz was killed at the end of a battle and Erminia committed suicide while she was being transported to Santiago. The child was adopted by General Santiella and given the name Erminia after her mother. Among Conrad's works, only "Amy Foster" and "Gaspar Ruiz" have such endings, as their children symbolize reconciliation or harmony after discord and hatred between two different cultures or ideologies. This paper aims to analyze the author's use of children in the stories and to understand their symbolic meaning in the stories.

### 1. はじめに

コンラッド(Joseph Conrad, 1857-1924)の作品の多くは、作家の出自のせいもあり、異文化どうしの遭遇と葛藤をテーマとして扱っている。とくにその創作活動の前期に属する作品群、処女作の『オールメイヤーの阿房宮』(Almayer's Folly, 1895)から『西欧人の眼の下に』(Under Western Eyes, 1911)に至る時期の作品は、マレー半島周辺、アフリカ、南米、西欧・東欧等を

舞台にした国際色豊かなものである。その中には『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)、『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899)、『ノストローモ』(*Nostromo*, 1904)などをはじめ評価の高い作品が含まれている。

今回この論考においては、コンラッド的な異文化に関する問題点を含む短編「エイミー・フォスター」(“Amy Foster”, 1901)と「ガスパール・ルイス」(“Gasper Ruiz”, 1906)を取り上げ、まず異文化どうしの遭遇と問題点を中心に論じることとする。その理由として、両作品の内容を分析すると共通した要素がいくつか確認できるからである。前者の舞台は英国の田舎町コールブルック(Colebrook)であり、後者は南米のチリ周辺を中心とする独立の動乱期を描いている。確かに創作時期と舞台は異なるが、大きな共通点は文化的な背景を異にする人物たちが軋轢と葛藤の中で悲劇的な最期をとげること、そして当事者の子供(子孫)に対して軋轢の解消と将来の発展的希望を託すような結末が用意されていることである。

このような子供(子孫)が異文化どうしの軋轢や誤解を解消する働きを示す物語は「エイミー・フォスター」と「ガスパール・ルイス」以外にはコンラッド作品においてははっきりと確認できるものはない。前者は、異文化にまつわるコンラッドの作風の原点を示すものとして取り上げられることがある。しかし「ガスパール・ルイス」を分析すると、この作品もまた作家が頻繁にあつかう文化的な軋轢に関する問題がより強く描写されていることが理解できる。この論考においてはさらに、前者に比べてそれほど注目度の高いとはいえない「ガスパール・ルイス」が、前者以上に激動の社会的背景を描きながら、巧みに政治・文化的な不和と融和を示している作品であること、また最終的に子共の存在が異文化どうしの和解と融和を示す存在であることを論証する。

## 2. 「エイミー・フォスター」について

「エイミー・フォスター」は短編ながら映画化を含め広く知られている作品であるが、その概略を紹介したい。アメリカへの移民船が難破して、カルパチア山脈付近の山村出身の若者ヤンコー(Yanko)が英国南部の田舎町コールブルックに流れ着く。そこで始めのうちは得体の知れぬ異邦人として奇異な目を向けられるが、スミス家(the Smiths)の人々やケネディー

(Kennedy)医師、そして何よりもエイミー(Amy)の助力により町に溶け込み、彼女と結ばれることになる。しかし次第に互いの文化的背景の相違が顕著になり、ヤンコーはエイミーに恐れを抱かれ、急病の際に見捨てられるように息を引き取るのである。

「ヤンコーの悲劇はエイミーの素朴さと表裏一体をなす無知や愚鈍さと、ヤンコー自身の持つ特異な境涯の『孤独』とがもたらす悲劇である」(松村28)と指摘があるように、この作品の特徴は、エイミーとヤンコーの人物像が非常にシンプルに描かれている点である。それは単純とか簡単ということではなく、二人の文化的な背景を象徴するような無駄のない描写が用いられているということである。エイミーは地元の村やその近郊から一度も離れたことがない女性として描かれている。また青年ヤンコーはエイミーと地域社会に受け入れてもらえることを一途に模索し苦悩するが、結局自分の文化的背景から生じる誤解や問題を克服することができずに悲劇的な最期をむかえることになる。このように互いの背景を極端にシンプルに描くことにより二人の背負っているもの(異文化の背景)が分かりやすく、また印象的に描かれているのである。<sup>1</sup>

二人の間にはジョニー(Johnny=Little John)という名前を付けた男の子が誕生する。しかし前述のとおり、両者の仲には溝ができてしまう。ある日、病に倒れたヤンコーを看病するエイミーは、母国語しかつづやかなくなつた彼と意思の疎通ができなくなり、最後は彼を恐れて家から飛び出してしまふ。そして放置された彼は息絶えるのである。ヤンコーの死後、彼のことは全く忘れてしまったかのように生活するエイミーであるが、「ヤンコー(Yanko)」の意味“Little John”(133)に由来するジョニーという名の息子を大切に育てるのである。

この点に関してギロン(Adam Gillon)は“*It is indeed poor consolation to Yanko Goorall that his son was called Johnny by Amy Foster, which means little John*”(124)と述べ、子供の存在は悲しい最期をとげたヤンコーに対する「慰め」ととらえているが、この意見は子供の存在意義を考察するのではなくヤンコーの感情を分析しているにすぎない。また最近の研究でもビルリック(Nurten Birlik)が映画版(*Swept from the Sea*)との比較研究の中で次の意見を述べている。

Both works [*'Amy Foster'* and *Swept from the Sea*] emphasize the idea that in a closed community individuals of another ethnic origin are brutally disenfranchised from the mainstream communal life and are pushed to the margins of silence and passivity.” (90)

この言及にも窺えるように、ヤンコーの孤独に注目が集まり、文化的な融和を考察する意見は見られない。深く突き詰めて、この子供の存在を二つの文化的な融合と和解を意味する象徴的な存在としてとらえる言及はなされていらないようである。

しかし、物語の流れと構成を考えると、子供の存在に大きな意味をもたせようとした作家の意図が感じられる。すなわち精神的な溝が生じた二人であるが、この作品にはヤンコーの死後、残された子供の存在により、二人の文化的な葛藤とわだかまりの解消を暗示させる描写が見られるのである。コンラッドは他作品においても象徴的に事物を用いる手法をとる場合があるが、この作品ではまず父親の名をヤンコーとし、その息子に英語名のジョニーをつける。そして物語の冒頭においてケネディー医師が最初にエイミーにかけた言葉が“*How's your child, Amy?*” (107)であり、ここで初めてエイミーが登場する。また最後の場面も子供の描写で終わる。このことは明らかに作家がこの子に特別な意味を込めていると推察できる設定である。またケネディーが最後の場面も語るのであるが、この子の世話をするエイミーの様子は全ての経緯を忘れたかの様子で、“*She is Amy Foster for everybody, and the child is 'Amy Foster's boy'*” (142) また“*She calls him Johnny—which means Little John*” (142)と描写されている。つまり周囲の者はその子を「エイミー・フォスターの子」と呼ぶのに対して「エイミーは小さなジョンを意味するジョニーと呼ぶ」と説明されるのである。当たり前のような事情をあえて挿入している作家の意図は、物語の始まりと終わりにおいて、その子は物語の原点であるという意味を込めたのではないかと考えられる。すなわちその子は、彼女の波乱の人生と最終的な希望の象徴なのである。ケネディーはまた“*I have seen her hanging over the boy's cot in a very passion of maternal tenderness*” (147)と説明するが、彼女の子供に対す

る愛情は悲劇の顛末ではなくこれからの希望の証なのである。

### 3. 「ガスパール・ルイス」について

南米を舞台にした作品としては、コンラッドの代表作『ノストローモ』が真っ先に思い浮かぶ。その多彩な登場人物と南米特有の不安定な政治風土、またヨーロッパや合衆国の思惑と利害が混在する複雑な国際情勢が窺えるプロットは、読者を強く引き付けるものがある。<sup>2</sup> 「ガスパール・ルイス」はその時代設定が『ノストローモ』の数十年前、まだ革命の動乱期である。その大作の取材中の副産物として創作され、内容表現がやや杜撰であるという批評も散見される (Baines 322)。しかしその短いプロットの中に、南米独特の風土と政治・文化地図を織り込んで描いている点は作家の非凡さを感じさせる。当時の中南米に広く当てはまることであるが、そこには複雑な文化・民族的な状況が存在した。ペニンスラーエ (イベリア半島出身の白人) とクリオーリョ (中南米で生まれた白人たちの子孫) といった支配階級たちの抗争を中心に、原住民のインディオ、両者の混血のメスティソ、奴隷として連れてこられた黒人たち、また黒人と白人の混血のムラト、黒人とインディオの混血サンボといった被支配階級の多様な状況も存在した。元来ヨーロッパの植民地としての影響から支配体制が確立され、地元で永住を始めたクリオーリョたちが独自の体制と文化を生み出すことになる。そして支配体制の利害から独立運動が発生する不穏な状況はよく知られており、被支配階級たちも深く抗争に巻き込まれた。

プロットの流れについては、サンティエラ (Santierra) 将軍が、50 年ほど前の独立革命に関するエピソードを回顧しながら、彼のゲストに語るという形式で始まる。南米チリで貧農の倅として働いていたルイス (Ruiz) は、ある日、共和派 (独立派) の軍と遭遇する。彼らは農場から必要な物資を勝手に調達した挙句に、ルイスをうまく口車に乗せて軍に入隊させてしまう。しかしルイスが王党派の捕虜となって行進させられたことが契機となり、彼は共和派からは裏切り者扱いになる。そして残酷なエスタバン (Estaban) 軍曹に処刑されそうになるが、一命をとりとめ彷徨っているときに、王党派の生き残りの一家に助けられる。そしてその家の娘エルミニア (Erminia) と運命的な出会いをする。

たまたまルイスを逮捕に向かったサンティエラと彼の上司ロブレス (Robles) 将軍を地震から助けたことにより、ルイスは共和派に復帰し、そこで手柄を立てて出世をしてゆく。しかしその最中、州長官の嫉妬をかい、無実の反乱の罪を着せられる。その長官を惨殺した後に、エルミニアの扇動もあり、彼は王党派として戦うことになる。ルイスは時として華々しい活躍をするが、次第に追いつめられる。同盟関係を結んでいたメンドーサ (Mendoza) 共和国の独裁者カレーラス (Carreras) に裏切られて妻エルミニアが敵方にとらえられてしまう。彼女を奪回すべく勇猛果敢にペケーニャ (Pequeña) 砦を攻めてゆくが、最後は砲台の代わりに自らの体を大砲に縛り付け、その攻撃の後息絶えることになる。捕虜となったエルミニアはサンティアゴ (Santiago) に護送されることになるが、その途中の山道で幼子をサンティエラに預けると、驟馬から崖めがけて飛び降り命を絶ってしまう。その出来事の直後に、再びサンティエラ将軍が回顧する場面に戻るのだが、最後にそのエルミニアの娘はどうなったのかとサンティエラはゲストに尋ねられて、現在彼の養女になっている大柄な中年女性 (ルイスとエルミニアの忘れ形見) を紹介するという結末をむかえる。因みにその養女にもエルミニアという名前が付けられている。

前述の「エイミー・フォスター」の場合には、異文化どうしの葛藤と不和について、主要人物の人間関係と苦悩を通して描いている作品であり、コンラッド自身の原体験も加味されている作品として評価されている (Baines 267)。それに対して「ガスパール・ルイス」は、それほど頻繁に研究されている作品ではないが、複雑な文化・政治的な背景を有する南米を舞台とし、またそこに展開される不安定な人間関係と心理を詳細に描き出している。

#### 4. 人物描写における特徴

双方の物語において、その主要人物たちは元来弱い立場の人間である。エイミーは賢明そうに見えない田舎娘であり、ヤンコーは言葉が通じない漂流者であり、ルイスは小作の貧しい若者、エルミニアは迫害された王党派の娘という具合に、誰一人として恵まれた境遇の人間は登場していない。しかしそうした人間たちが人並み以上の力を発揮するという点に関して、

コンラッド自身の人間の力を信じる考え方が窺える。弱い立場の人間が、環境や運命によって時として超人的な働きや力を発揮するというストーリー展開は、コンラッド作品によく見られる傾向である。ジムやノストローモもその典型である。そうした意味でコンラッドは一人の人間が有する力、可能性というものを描くことに強い関心を示していた。<sup>3</sup>

それではそうした弱い立場の人間が強い力を発揮できた理由とは何かと突き詰めてみると、それは自分たちの思いに忠実で純真な心をもってのことである。エイミーとヤンコーにしても相手を思う一途な気持ち以外は何ももっておらず、周囲の反対や偏見に対しても意に介する様子はなかった。ケネディーは、そうした純真な気持ちと性格がかえって奇妙な恋を成就してゆく経緯を語る。

Her short-sighted eyes would swim with pity for a poor mouse in a trap, and she had been seen once by some boys on her knees in the wet grass helping a toad in difficulties....She fell in love under circumstances that leave no room for doubt in the matter; for you need imagination to form a notion of beauty at all, and still more to discover your ideal in an unfamiliar shape. (109)

エイミーはその愚鈍な印象にも関わらず、弱者に対して純粋に思いやる気持ちをもっていった。その強い同情心が、異邦人との特別な愛を成就させることになる。ヤンコーにしても、ほとんどエイミーに対する愛情のみに支えられて、一言も言葉が通じない状況からある程度村人に愛される存在になっていったのである。ルイスの場合にも無知で純朴な田舎の青年が、最後には共和国を揺るがすような反乱を導くことになる。この場合かなりのデフォルメがあるにしても、エルミニアを思う彼の一途な気持ちと終始変わることがない彼女の復讐心が結びつき、反乱を起こす経緯となってゆく。サンティエラはまたこの状況を“pour intoxication, madness, poison into an empty cup” (52)と表現し、ルイスという「空の器」にエルミニアは「陶酔と狂気、そして毒物を注ぎ込む」ように復讐心を満たしていったと揶揄する。コンラッド作品における女性の働きと力ということに関しては、フィッターカー(Eve M. Whittaker)は“Sometimes a woman can be seen to be

consciously directing history; sometimes she is blindfolded: she does not (perhaps) understand” (268)と述べ、コンラッド作品に登場する女性が、大胆に歴史を動かすようなことをやってのける様子を指摘している。

コンラッドは、人間の弱さと強さは表裏一体であり、また両刃の剣であることも十分承知していた。一途な純粋な気持ちは、時として歯止めが利かなくなり暴走してしまう性格をもつことを作家は強調している。エイミーとヤンコーも一途の思いから一度愛を成就できるのだが、また息子への一途な愛のために誤解が生じ、最終的な破局へと向かう。ルイスとエルミニアの場合も、彼のエルミニアへの純粋な愛が一種の信仰のようなものになり、愛と復讐心というものが一つになってしまうのである。そして歯止めが利かなくなった二人の気持ちは、やがて国を二分するような大事件へと発展する。

以上の点を考慮してみると、「エイミー・フォスター」と「ガスパール・ルイス」は主要人物たちの性格と傾向性の面でかなり似通っていることが分かる。すなわち一途な気持ちに従って突き進んでしまう純粋さと短絡的な性格である。しかし後者は明らかに南米の文化・政治風土と相まって複雑な様相を呈しており、それゆえにコンラッドがその複雑な状況を描くためにも人物たちの性格や人生を誇張しているのである。コンラッドが『ロード・ジム』の中でも展開している「自己破壊的要素」と呼べるものは、ある意味ではこうした純粋な気持ちの表れであり、セルフコントロールが利かなくなった一途な気持ちともいえよう。

しかしその反面、コンラッド作品に関してはそうした気持ちの暴走に理性的、また批判的な目を向ける存在もある。例えばそれはいくつかの作品に登場する作家の分身的な存在マーロー(Marlow)の分析的な視点であり、『ナーシサス号の黒人』(*The Nigger of the 'Narcissus'*, 1897)にも表現されているような精神的な秩序の維持である。マーローは『ロード・ジム』においてはジムに対して常に慈父のような眼差しを注ぎ、最終的にジムの悲劇的最後を冷静な目で見つめている。また『闇の奥』においても生と死を見つめるような透徹した視点を有している。「エイミー・フォスター」においてはケネディー医師が登場し、「ガスパール・ルイス」においては唯一透徹した視線で見ているのは語り部のサンティエラということになる。半



世紀の時を経て回想する設定になっており、落ち着いた客観性のある視点を有している。コンラッド作品に関しては、純粋な気持ち、ある意味では人間の本心とか激情を表す部分と、それを落ち着いて観察する理性的な視点という立場が二つの支点として物語を支えている場合が見られる。その比較観察により、悲劇的な部分の提示や人間の強さと弱さの描写、また、より考えさせられるテーマの演出をおこなっているのである。

このようにしてコンラッドは心理の動きを観察し、物語の英雄性と悲劇性を対比させており、「ガスパール・ルイス」においてもその手腕が発揮されている。そしてサンティエラの落ち着いた目がその経緯を理性的に語り、人間の生き方や運命に対する読者の考察を求めるのである。悲劇にまつわる人間や異文化を背景とした誤解と不和が強調され、また透徹した視点が最終的な和解と融和を示すのである。

## 5. 政治的風土と復讐心

長編『ノストローモ』でも描かれている通り、とくに19世紀初頭の南米はボリバル（Simón Bolívar, 1783-1830）のような指導者に代表されるように、独立革命の機運にあふれる時代を迎えていた。「ガスパール・ルイス」でもサン・マルティン（José de San Martín, 1778-1850）が登場するように、1810年代を舞台としていることが分かる。前述の通り、南米独立の契機はスペイン出身の上流貴族たち（ペニンスラーレス）と南米で生まれたスペイン系の人たち（クリオーリョ）の間での利害関係がもととなっている。またクリオーリョたちは南米の支配体制と風土の中で、また土着民たちとの交流を通して、スペイン本国とは異なるラテンアメリカ独自の文化を確立していった。スペイン統治が続く中で、南米の地元出身者が増えてくれば支配と権力の攻防が発生してくることは自然の流れであった。赤貧の状態であった小作の倅という設定により、ルイス自身はガウチョと呼ばれるような牧童や労働者、あるいはメスティソと呼ばれる白人と原住民の混血であった可能性もある。しかし“His people were in too humble a station to feel much disadvantages of any form of government” (6)とあるように、貧困の下層階級にとっては政治権力の交代も彼らの生活にとってはさしたる影響を与えるものではなかった。主人公がそのような下層市民である位置づけが、

主人公の土着性を表す要素としてこの物語で使われているのである。

コンラッド作品においては地域の土着性を表す人物が頻繁に登場する。とくにマレー地方を題材とした作品では、『ロード・ジム』に登場するジュエル(Jewel)や『島の流れ者』(*An Outcast of the Islands*, 1896) 中のアイサ(Aïssa)などの少女たちが登場し、白人の主人公たちと対照的な現地の人間としての立場や混血の立場としての軌轢、また現地の文化を表すアイコンとしての役割を担うことにもなる。そうした意味ではエイミーも地元の村を離れたことがない人物の典型と言えよう。「ガスパール・ルイス」の場合は男性の若者が現地のアイデンティティを代表しており、他の短編「カレイン」(“Karain”, 1897)の設定にも相通じるものがある。

ハーファム(Geoffrey G. Harpham)は *One of Us* の中で“The Conradian hero is both extraordinary and typical, alien but one of us, exotic and yet familiar” (54)と述べ、コンラッド作品の主人公たちが、我々と同じような平凡な人間でありながら、なおかつ特異な点を有する人物であることを強調している。エイミーの場合はヤンキーとの出会いがなければ平凡な田舎娘としての人生を過ごしたであろうし、ルイスもまた貧しい農場労働者として一生をおくったに違いない。ここで注目すべき点は、「エイミー・フォスター」の場合には、あくまでも二人の狭い世界での物語展開が描かれるのに対し、「ガスパール・ルイス」では、主人公たちが動乱の社会と国情の中で、激しく運命に翻弄される様子が描かれていることである。

まず共和派(独立派)にも王党派に対しても、とくに関心や利害もないルイスが、たまたま通りかかった共和派に引きずり込まれる点が不運の始まりであった。当時の革命事情はペニンスラーレスとクリオーリョたちによる支配階級の争いや南米独特のカウディーヨ(地方政治の頭目たち)による勢力争いの混乱を映し出している。ルイスの一家も共和派が立ち去った後、今度は王党派の軍によって財産を全て略奪されるという悲劇に見舞われるが、彼の両親は命が助かっただけでも良かったと安堵する。そしてルイスが王党派の捕虜となった時に、たまたま行軍の先頭に立たされたというだけで共和派から裏切り者扱いにされ、銃殺刑に処せられることになる。同郷のエスタバン軍曹に命乞いをするが出世欲に駆られた男に話は通じなかった。下層民がないがしろにされる独立戦争の実態が如実に描かれ、

また肉体と精神のバランスを欠くルイスという人物には、作家の意図的なデフォルメが感じられる。こうした異能の主人公の描写がノストローモを含む他のヒーローの系譜に連なることは、バッチェラー(John Batchelor)も“*I think that Conrad was drawn to a figure of huge and gentle strength for reasons, such as Singleton, Falk, or Nostromo, in his other fictions*” (186)と述べて指摘している。

物語中の描写“*as though the vigour of his spirit were by no means equal to his strength of his body*” (5) にもあるように、ルイスの人物像は体力に比して知的な部分が欠如していながら、性格的にはとても純粋で従順、また体格と体力は怪物のように力強いという描き方がなされている。これは後にエルミニアの協力があるにしても、軍隊を統率する人物描写としては極端な描き方だと思われる。しかしエルミニアの精神的な存在とルイスの肉体的な存在を考えるうえで、かなりのデフォルメが行われているのである。この点に関してはサイド(Edward W. Said)も“*Only the strange woman whose power feeds his soul, and who then becomes his intellectual and emotional motivation, can lead him to power and success*” (125)と述べ、ルイスを権力へと導くエルミニアの力を指摘する。コンラッドによる対照的な描写という視点から、一市民の弱い立場と翻弄される人生が、時代の流れによって大きなエピソードに発展してゆく。そしてその象徴的人生模様が、ルイスの自分では御しがたい強力な体力と相まってこの物語を盛り上げ、またそれ自体が南米の混迷した状況を象徴しているのである。すなわち、カリスマ的なリーダーが現れて強力に政治や覇権を行使してゆくような、不安定な風土が反映されているわけである。サンティエラ自身もエルミニアのカリスマ的力、また王党派を動かす象徴的な力を説明する。

For who could have imagined that a young girl, daughter of a ruined Royalist whose life was held only by the contempt of his enemies, would have had the power to bring death and devastation upon two flourishing provinces and cause serious anxiety to the leaders of the revolution in the very hour of its success! (25)

エルミアの家族は元来王党派の出自で、父親はスペインの上流階級の出身であり、革命以前は地元でかなり羽振りのよい一族であった。しかし共和派により身分・財産を剥奪され、村はずれで命からがら暮らしていた。エルミアの父親はあまりの不遇の中で、半ば正気を失っていた。彼女も美しいながらも朽ち果てる王党派の運命と同様に、ルイスと出会った時には風前の灯のようにか弱い存在であった。そうした意味で、「ガスパール・ルイス」は、死にかけていた二人が運命的な出会いをし、復讐心を糧に再び立ち上がる物語ともいえる。身分が違う二人が結びついたことについてサンティエラは、復讐心に基づく「憎しみの狂気」と断言する。

But that a young girl, famous for her haughty beauty and, only a short time before, the admired of all at the balls in the Viceroy's palace, should take by the hand a guasso, a common peasant, is intolerable to our sentiment of women and their love. It is madness. Nevertheless it happened. But it must be said that in her case it was the madness of hate—not of love. (26)

サンティエラが述懐するように、共和国を揺るがす大きな出来事がルイスと彼を支えるエルミアによって引き起こされるわけであるが、共和派で活躍する彼が再び裏切られる展開は、ルイスの共和派に対する復讐心を決定的なものにし、またエルミアの復讐計画に打ってつけの流れとなる。彼女は、ルイスがどのような立場に置かれても協力者となり妻ともなったが、最後まで共和派に対しての復讐を忘れずにおり、最終的にルイスを自分の復讐劇に巻き込んでゆくのである。そしてルイスのエルミアに対する感情は、一種の崇拜のような形になってゆく。

They told how after every skirmish, after every raid, after every successful action, he would ride up to her and look into her face. Its haughty calm was never relaxed. Her embrace, señores, must have been as cold as the embrace of a statue. He tried to melt her icy heart in a stream of warm blood. Some English naval officers who visited him at the time noticed the strange character of his infatuation. (48-49)

このようにして次第にエルミニアのカリスマ性とルイスの彼女に対する心酔ぶりが深まってゆくのである。

## 6. 愛と復讐心

「エイミー・フォスター」の場合、二人の純粋な気持ちを基調とした恋愛の話と解釈もできるが、それを伏線にした異文化どうしの遭遇と誤解、破局という踏み込んだ解釈が可能な作品でもある。異文化の理解というものは、表面的な、あるいは理論的な理解と、実生活のレベルの理解とはかなりかけ離れたものがあり、本当の意味で人生の背景を異にする者たちが理解しあうことは困難なものがある。この作品はそうしたテーマを深く盛り込んだ作品でもある。個人的な小さな出来事の中にそのような象徴的なテーマを盛り込んでいる点が評価されているといえよう。

「ガスパール・ルイス」の場合、ある意味ではメロドラマとしての要素も窺えるが、「エイミー・フォスター」と異なる部分は、最後までルイスとエルミニアとの信頼関係が揺るがなかった点である。スペイン貴族の末裔のエルミニアと地元の小作人の倅が恋愛関係に陥り最後までお互いの信頼が崩れなかったという点を考慮すると、この作品は従来のコンラッド作品における異文化に関する誤解や軋轢のテーマとは異なる様相を呈している。この作品には単なるロマンス的な恋愛という部分を昇華させ、精神的な象徴性をもたせる工夫がなされている。前述の通り、異常なまでの体力をもつルイスと今にも消えてなくなりそうな貴族の末裔であるエルミニアが出会い、しかも彼は瀕死の状況であった。二人とも出会いがなければ滅びゆく存在であったわけである。そして助け合うことにより立ち直ってゆくのであるが、当初より恋愛感情以上にルイスのエルミニアへの盲目的な愛、一種の崇拜のような気持ちが現れている。

体力的に優れたルイスと精神的に彼を支配するようになるエルミニアは、一心同体となり自分たちの目的に向かって突き進んでゆく。それはまた権力闘争の犠牲となり抑圧され独立革命の渦に巻き込まれてゆく人々と、精神的に彼らを支配しようとする権力者の立場を象徴しているとも考えられる。最終的にエルミニアによる復讐心がルイスを共和派（独立派）に対する闘争へ駆り立ててゆくことになるが、おそらくルイスにとってはエルミ

ニアの気持ちを満足させることが一番の願いであり、利害と精神的な目標が一致することになる。そして最終的に力を合わせて王党派の反乱分子として活躍する彼らにとっては、二人の間での誤解や不和は生じることはない。しかし、それに代わって共通の敵である共和派への憎しみと不和が前面に登場し、コンラッドの悲劇らしく自己破壊的な結末に向かってゆくことになる。

## 7. 子供に託すこと

前述の通り「エイミー・フォスター」と「ガスパール・ルイス」は、コンラッド作品の中では、子供（子孫）に大切なメッセージを託そうとする作品である。前者は最終的な場面でヤンコーが、エイミーの誤解も重なり病死してしまうが、エイミーはヤンコーの名から名付けたに違いないジョニーという忘れ形見を大切に育てている。彼女はヤンコーのことを思い出すことがあるのかどうかとケネディーは疑問をもつが、彼女が一途に息子を可愛がっていることは明らかである。エイミーは子育てに関して、自分の母国の言葉や風習を子供に教えようとするヤンコーに対して誤解と反発を抱き、最終的な破綻が生じる。これは一種の異文化どうしの不理解と破綻を暗示していると考えられるが、また残された子供には「そうした軋轢と恨みを忘れて文化的な理解と融合を目指そう」というメッセージが込められていると解釈できる。エイミーがヤンコーの忘れ形見を心から大切に育て、その生活に見出した心の平穩こそは、そうした文化的な理解と融和を象徴している場面と考えられるからである。

「ガスパール・ルイス」もそうした考えとかなり共通したメッセージを含んでいる。最後にエルミニアから託された娘に関してゲストから尋ねられたサンティエラは、40歳くらいの体格の良いそして黒い瞳をした婦人を自分の養女として紹介する。もちろんそれはルイスとエルミニアの特徴を受け継いだ二人の忘れ形見であるが、独身を通したサンティエラの家門を守るべく彼女も独身で家族の世話をしている。この結末にも、独立戦争がおさまった時代を迎え、共和派と王党派の和解と融和が象徴されていることは間違いない。また虐げられてきた庶民と支配者階級の融和とも解釈できる結末である。その証拠にサンティエラ自身がその遺児に関して“**You**

have beheld the guardian angel of the old man” (69)とも言い、また“*She is General Santierra’s adapted daughter and heiress*” (69)と断言しているのである。心から信頼し愛する存在であるからこそ“angel”と言い“heiress”とも呼べるわけである。

「エイミー・フォスター」に比較して「ガスパール・ルイス」は一般的な評価や知名度という点に関しては高い作品ではない。また南米を描いた作品としては長編の『ノストローモ』の方が圧倒的に研究されている。しかしその内容を分析してみると、「エイミー・フォスター」に比べてもその異文化的な要素の不和と融和という点に関しては、その象徴的な描き方とメッセージ性において決して見劣りがする作品ではなく、むしろ南米の不穏な状況、独立革命時の複雑な国情をも巧みに描き出している。また様々な国々の南米における利害に関してサントメ(San Tomé)の銀山を中心にキャピタリズム批判の視点で分析してみせる『ノストローモ』に対して、その南米の精神風土を描き出した作品が「ガスパール・ルイス」であると解釈できるのである。以上の意味で「エイミー・フォスター」と「ガスパール・ルイス」は、コンラッド作品に特有の異文化における不和と融和というテーマを最終的に子供(子孫)の存在に象徴させた興味深い作品であり、後者は南米の複雑かつ特殊な事情をも描き出している評価すべき作品といえるのである。

## 注

<sup>1</sup> ピーターズは「エイミー・フォスター」における異文化の関係性について以下のように解説する。そして人間個人としての関係における異文化の受容の難しさも指摘する。

Conrad demonstrates that the difficulties that arise when Western and non-Western cultures interact result not simply from differing settings and societies but rather from a general human inability to accept difference in others. (Peters 72)

この作品に関しては、異文化の問題が色濃く盛り込まれているという解釈が一般的になっている。

<sup>2</sup> 『ノストローモ』において、帝国主義の利害が入り乱れる南米が詳細に描写されている点は、以下フェルコフが指摘するように定評がある。

Although Latin American literature itself is understandably rich in novels dealing with political disorder, militarism, dictatorship, revolution, and civil war, I know of no work in Spanish or Portuguese that provides so complete a sociology of these unfortunate, ill-starred societies. *Nostromo* is the best—the most enduring—political novel ever written about Latin America. (Falcoff 35)

そして「ガスパール・ルイス」の舞台は、『ノストローモ』に登場するコンスタグアナ(Constaguana)共和国が形成される数十年前の動乱期を描いているが、『ノストローモ』の設定を考慮すると、その革命時の動乱が巧みに描写されていることが理解できるのである。

<sup>3</sup> カールは『ロード・ジム』における作家の表現力に関しては以下のように評している。

Although *Lord Jim* is often more imposing in its parts than as a whole, it nevertheless retains a power and a force rarely duplicated by Conrad's contemporaries or by Conrad himself in his later work; obviously, Conrad's way of conceiving this novel makes *Lord Jim* his as yet most comprehensive statement on man. His ability to suggest and evoke is evident, and from here to "Heart of Darkness" is not a great step. (Karl 132)

以上のようにコンラッドが人間の持つ潜在的な力を力強く表現する点について、その後の作品に登場する描写力が、初期のこの作品においてすでにながりの完成度を示している点を指摘している。

## 参考文献

- Ash, Beth Sharon. *Writing in Between: Modernity and Psychosocial Dilemma in the Novels of Joseph Conrad*. London: Macmillan, 1999.
- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenheld and Nicolson, 1960.
- Batchelor, John. *The Life of Joseph Conrad*. Oxford: Blackwell, 1994.
- Birlik, Nurten. "Two Cases of Marginalization Told from the Wings: "Amy Foster" and *Swept from the Sea*." *A Journal of the Humanities and Social Sciences* 13.1 (2009):83-91. Web. 18 December 2014.
- Bross, Addison. "A Set of Six: Variation on a Theme." *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol.3. Mountfield: Helm Information, 1992. 105-21.
- Collits, Terry. *Postcolonial Conrad: Paradoxes of Empire*. 2005. London: Routledge, 2006.
- Conrad, Joseph. *Almayer's Folly*. The Medallion Edition of the Works of Joseph



- Conrad. Vol.1. London: Gresham, 1925.
- . “Amy Foster.” *Typhoon, and Other Stories*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol.3. London: Gresham, 1925.
- . “Gaspar Ruiz: A Romantic Tale.” *A Set of Six*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol.11. London: Gresham, 1925
- . “Heart of Darkness.” The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 6. London: Gresham, 1925.
- . “Karain: A Memory.” *Tales of Unrest*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol.1. London: Gresham, 1925.
- . *Lord Jim: A Tale*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol.4. London: Gresham, 1925.
- . *The Nigger of ‘Narcissus’*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 3. London: Gresham, 1925.
- . *Nostromo: A Tale of the Seaboard*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol.8. London: Gresham, 1925
- . *The Secret Agent: A Simple Tale*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol.10. London: Gresham, 1925.
- Falcoff, Mark. “Conrad’s Latin America.” *New Criterion* 23.5 (2005):35-39. Web. 20 February 2015.
- Gillon, Adam. *The Eternal Solitary: A Study of Joseph Conrad*. New York: Irvington Pub, 1960.
- GoGwilt, Christopher. *The Invention of the West: Joseph Conrad and the Double Mapping of Europe and Empire*. Stanford: Stanford UP, 1995.
- Harpham, Geoffrey G. *One of Us*. Chicago: U of Chicago P, 1996.
- Hewitt, Douglas. *Conrad: A Reassessment*. Cambridge: Bowers and Bowers, 1952.
- Hey, Eloise Knapp. *The Political Novels of Joseph Conrad*. Chicago: U of Chicago P, 1963.
- Karl, Frederick R. *A Reader’s Guide of Joseph Conrad*. Rev. ed. Syracuse: Syracuse UP, 1997.
- Peters, John G. *The Cambridge Introduction to Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Said, Edward W. *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography*. 1966. New York: Columbia UP, 2008
- Wake, Paul. *Conrad’s Marlow*. Manchester: Manchester UP, 2007.
- Watt, Ian. *Essays on Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.

Whittaker, Eve M. "Amy Foster and the Blindfolded Woman." *Conradiana* 39.3 (2007):249-72. Web. 25 January 2015.

杉浦廣治『夢の光芒—「ノストローモ」の世界』東京：英宝社、1997.

照屋佳男『コンラッドの小説』東京：早稲田大学出版部、1990.

松村俊彦『放浪の作家ジョゼフ・コンラッド』大阪：大阪教育図書、2000.

吉岡栄一『亡命者ジョゼフ・コンラッドの世界—コンラッドの中・短編小説論』東京：南雲堂フェニックス、2002.

吉田徹夫『ジョゼフ・コンラッドの世界—翼の折れた鳥』東京：開文社出版、2002.

(わたなべ ひろし 就実大学教授)